



令和4年12月8日~9日 コロナ禍で延期されていた「青雲」の落慶法要 三十二世中興俊良泰彦大和尚大祥忌(三回忌)法要が併修されました

東京別院春彼岸合同供養会

日時 令和五年三月十一日(土) 九時の部 十一時の部 十三時の部
十二日(日) 九時の部 十一時の部 十三時の部
場所 紫雲・白雲

◎ お申し込みは同封のご案内を御参照ください
◇ また下記のZoomフォームから



本院大般若祈禱会

日時 令和五年三月二十一日(春分の日)
午後二時より
場所 桃源院本堂

◎ オミクロンの影響の現状を鑑み、地区を代表して担当役員が参列いたします。

◎ お申し込みは

◇ 祈禱袋の表面に、地区・願主名・住所を記入してください。
◇ 祈禱袋の裏面に、願い事にチェックを入れてください。



機 鋒

TOUGEN NEWS
3 月 1 日

発行所 桃源院
発行責任 桃源院 広報部
〒191-0065 日野市旭が丘3-1-4
編集 遠藤隆幸 河野寛然
アドレス tougen@momo.or.jp

摩訶迦葉 不可思議な夫婦の話

摩訶迦葉

波羅(ピッパラ)の木の下の出産しました。奇縁ですが、釈迦もこの木のもとで悟りを開かれたので、今は菩提樹(覚醒)と呼ばれていま

初祖摩訶迦葉尊者



王舎城に近い村の貴族婆灌門の家に生まれました。ここは現在のパトナ市の南方で、王舎城の旧址のあるジギルに近いところ。お父さんは尼拘律陀・羯波(ニグロイダ・ゴーパ)とい、マカダ国の王さまより金持ちといわれた大地主でした。懐妊したお母さんが庭を散歩していて、急に産気づいて、畢

波羅(ピッパラ)の木の下の出産しました。奇縁ですが、釈迦もこの木のもとで悟りを開かれたので、今は菩提樹(覚醒)と呼ばれていま

無事に成長して八歳になった頃から、バラモン階級の行事、規律、思想など細かなところまで、そして他に算学や文字、物語や音楽、占いまでの本格的な教育を受け始めました。ところが生まれつき聡明だった王子は、あつという間にその全てを習得してしまします。

結婚

この像を両親のもとへ運び、「これを越えるくらい美しい娘がいるなら、もちろん妻に娶ります」と宣言したので、これには両親も、ほとほと困り果てしまいました。あまりにも美しい黄金の乙女像だったからで、この世にいないだろうと思うくらいで、一説によると、こ



の金色の乙女像を作ったのはじつはピッパラヤナ自身だった。手先も器用で「金細工にも長じていた」と「伝灯録」などには「その書いてありま

女像を祭り、それを町から町、村から村へと引き歩いて「この美しい女神さまに供養すれば、女神様は乙女の願いは何でもかなえてくださるぞ」とふれ歩くところが実際に、これは簡単に進みません、やはり黄金の乙女像に上り美しい娘は現れないのです。とうとう、ガンジ

桃源院
三十二世中興俊良泰彦大和尚三回忌法要
「青雲」落慶法要 併修



ス河を渡り、遠くウ
エーシャリの近きま
で練り歩いていきま
した。迦毘羅迦（カ
ピラカ）という村に
着くと、噂を聞いた
村の乙女たちは争つ
て女神を迎え、「諸縁
吉祥」を祈りまし
た。

橋戸耶（キヨウシ
ヤ）という婆羅門の
娘、妙賢（ブハツダ
ーカピラーニー）も
友達に誘われて、噂
に高い女神を拝みに
行きました。

その妙賢が黄金の
乙女像の前に進み出
ると、まわりの人々
が息を飲みました。
この妙賢の美しさは
黄金の乙女像に劣ら
なかつたそうです。
彼女の美しさは乙女
像の黄金の光を失わ
せるほどだったそう
です。

それを目の当たり
にしたバラモンは、
キヨウシヤのもとを
訪ねて事情を懇切丁
寧に説明して、妙賢
をピッバラヤナの嫁
に貰えないかと話し
を切り出します。

大切な娘、妙賢の
縁談です。キヨウシ
ヤはピッバラヤナの
家が本当に大地主の
バラモン階級なのか
確認してから後の話
にしてくれと答えま
した。

数日後、キヨウシ
ヤは二人の息子にピ
ッバラヤナの父親の
ニグロード・ゴープ
の領地を見に行かせ
ました。

それを知った嫁探
しのバラモンは、大
急ぎでニグロード・
ゴープにそれを伝え
ると、ニグロード・
ゴープは数え切れな
いほどの牛の群れを
途中の道に放しまし
た。そして、妙賢の
兄弟がやってくる
と、臣下の者が手厚
くもてなします。

兄弟が「この牛の
群れはどなたのもの
ですか？」と尋ねる
と、「これは、ニグ
ロード・ゴープ様と
いうバラモンの所有
の牛の群れです。こ
れから先、ニグロ
ード・ゴープ様のお屋
敷まで他人の土地を
通らずに行けます。
ずっとこのような牛
の群れが途切れませ
んよ」と答えます。

兄弟は、その豊か
さを目の前にして、
「どれほどの大金持
ちか分かったから、
もう早く父に報告し
よう」と途中から帰
ってしまいました。

こうしてピッバラ
ヤは、とうとうこの
妙賢を娶らねばな
らなくなりました。

結婚して二人は非
常に仲よく暮らした
のですが、それは世
界観や人生観につい
ての思索の友として
仲が良かったのであ
って、夫婦としての
交わりは結婚後十数
年経てもついに経験
しなかつたそうで
す。

ピッバラヤナの両
親は、わが子に後継
ぎのないことを歎き
ながら、相次いで亡
くなりました。そこ
で、夫妻は親のあと
を継いで家業に従事
しなければならなく
なつたのです。

ある日、妙賢はピ
ッバラヤナの指示
で、牛に飲ませる胡
麻の油をたくせんの
使用人に絞らせまし
た。彼等は命令通り
に、胡麻の実を天日
にさらすと、たくさ
んの虫がうごめき出
てきます。使用人た
ちは気味悪がつてさ
さやきました。

「こんなにたくさん
の虫を殺したら、ど
んな罪になつてしま
うのだろう。でもこ
れは奥様の命令だか
ら、私たちの罪では
なくて、きっと奥様
の罪になるのだろ
う」

それを聞いた妙賢
は、確かにそうだと
思い、使用人たちに
胡麻を絞るのをやめ

さして、部屋に閉じこもって物思いに耽りました。ピッパラヤナも農場



を、耕作中の使用人が鋤で虫を次々に殺しているのを見ました。「生活に必要な

ピッパラヤナは、自分の財産を精査して、妙賢の生活の分配すると、「師が見つかつたら連絡するから、あなたを残

出家

どういふ訳かと話合せてみると、問題は全く同じ根源のものでした。お互いに心の内を語り合った結果、ピッパラヤナは、「だから私はどうしても出家したい」と妙賢に言いました。それは妙賢も結婚前から考えていたので、ふたつ返事で同意したのです。それにこれまでは両親への配慮で家業を手伝って来ましたが、今ではもう何も出家を邪魔するものはありません。



上の野菜を採るために殺しているというのにはなんと罪深いのだらうか。ひどい衝撃を受けた急ぎ家に帰り、じつと物思いに耽ったのです。気づけば、妻の妙賢も打ちしおれて悩んでいました。どういふ訳かと話合せてみると、問題は全く同じ根源のものでした。お互いに心の内を語り合った結果、ピッパラヤナは、「だから私はどうしても出家したい」と妙賢に言いました。それは妙賢も結婚前から考えていたので、ふたつ返事で同意したのです。それにこれまでは両親への配慮で家業を手伝って来ましたが、今ではもう何も出家を邪魔するものはありません。

歳の時であり、十二月八日の早朝です。迦葉が家を出たのもこの日の早朝だったといひます。迦葉は三年ほど各地を巡りました。その途中で釈迦の噂を耳にします。釈迦はさとりを開かれた後、まず鹿野苑(ろくやおん)で五比丘を救い、ブツダガヤに戻られて、

三迦葉(サンカシヨウ)とその同門一千人を弟子にします。それから王舎城へ赴かれ、マガダ国のピンバシヤ王の御依を受け、竹林精舎を建立させます。やがて舍利弗、目連とその他の同門二百五十人が弟子入りして、竹林精舎に釈迦と一千二百五十人の弟子

が滞在していることを知ったのです。迦葉は喜んで竹林精舎に向かいます。釈迦もそれを察知される。彼の過去の善は熟して道に入らしめよう。と竹林精舎を出て行かれました。迦葉が王舎城の近くの村までやってくると、近くの樹の下にひとり僧が座っておられました。その尊い姿から、釈迦だと分かった。迦葉は、ひれ伏して礼拝し、「世尊よ、私は世尊の弟子となるべき身でございます。」と、御身はわが弟子である。汝よ、私は覚者であるぞ。と、釈迦の言葉は自信に満ちていました。迦葉が弟子となることを快諾された釈迦は、人間の迷いと悟りについて説き、さらに四聖諦、十二因縁などの基本的な説法をされました。迦葉は魂をゆすぶられ、喜びに打ちふるえ、八日目には悟りを開いたといわれています。

というのに毎日会って食べものを分け合せて、ものすごく親密に見えます。まるで未だに俗人の夫婦のようです。妙賢尼は噂を聞いて心が痛み気も挫け、もう傷心の砂漠を放浪するようでした。

大迦葉は妙賢尼に言いました。「ブハッダーカピラ道(ブハッダーカピラ道)を修めるには、内と外のきびしい困難に打ち克たねばならない。ブハッダーカピラニ(ブハッダーカピラニ)よ、道を修める者は困難に萎縮してはならない。この激励の言葉によって彼女は大いに会得するところがあつたようです。そして、悟りの原石は間断なき精進によって輝く宝石となり、大悟を得ることができたのです。」

拈華微笑

釈迦が靈鷲山におられた時、金波羅華という一本の花を持って説法に立たれました。ところが何にも話



これを拈華微笑といひます。釈迦はここで大迦葉の悟りを本物と認めたのでした。このことから禅宗では、悟りとは最後は言葉など必要とせず、面對面、心と心で伝え合うものとしていひます。これを「以心伝心」ともいひます。こうして禅宗で

阿難尊者をはじめとして、お弟子さまたちが遺体を火葬しようとしていました。七日間火が着かず、大迦葉が到着して、到着を待っていたかのように燃え上がったと言われている。大勢が悲しんでいた。

存じですか? 「ああその方なら、七日前に涅槃に入られました。この花はそこへ集まったものからもらったものですよ。」 それを聞いた大迦葉は悲しみのあまりその場に崩れ落ちました。上がると急いで釈迦のもとへ駆けつけました。

仏典結集

阿難尊者をはじめとして、お弟子さまたちが遺体を火葬しようとしていました。七日間火が着かず、大迦葉が到着して、到着を待っていたかのように燃え上がったと言われている。大勢が悲しんでいた。

満場一致で、間違いないと承認したものを残しました。こうして、人類の指針となる仏教の教え、一切経七千余巻が残されたのでした。

釈迦の教団で、大迦葉は「頭陀第一の弟子」と称せられていました。頭陀というのには「頭陀ぶくろ」の頭陀ですが、



十大弟子

もともとはデューダ「一行」という意味で、釈迦の十大弟子の中で、「行」では随一の弟子であったといわれています。「行」を重んずる禅が、特に大迦葉を第一祖と仰ぐのも、ここに由来すると思われまふ。